
最強が行く世界その名は、マブラヴ！？

戦場へ行く破壊者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強が行く世界その名は、マブラヴ！？

【Nコード】

N31950

【作者名】

戦場へ行く破壊者

【あらすじ】

彼、夜神 海斗は色んな世界に行くことができる力を持っている、行く世界の先々では色んな呼び名がある、神や死神や悪魔や救世主や破壊者や創造主など言われていた。そんな彼が次の世界に行こうとしたら神に呼び止められ、とある世界を救ってほしいと頼まれた、いくつかの願いを彼は言っつてその世界に行くのでした。たぶん。

ぶつちやけ言つてネタに走ります。シリアス？なにそれ？おいしいの？ややハーレム気味にしていくつもりです。チョーリース。

プロローグ（前書き）

ちよつと書いてみました。続くかどうかは分かりませんが、読んでくれたらありがとうございます！アドバイスとかもくれたら下さい。

プロローグ

「プロローグ」

「ここは、どこだ？」

白い空間の世界に歳が17〜18歳ぐらいの一人の少年が立っていた。彼の名前は「夜神 海斗」（ヤガミ カイト）である。いろんな世界を旅している、最強の男である。

「何で俺はこんな所にいるんだ？たしか、前の世界の旅が終わったから転移魔法で新たな世界に旅立った筈なんだが？」

と色々と思案していると、目の前に光の球が現れました。

「なんだこの光の球は？」

「私は神です」

「おおお！喋った！！そして行き成り神発言！？」

「貴方をここに連れてきたのは、お願いがあつて連れてきました」

「お願い？」

「はい、実はとある世界をBETAから救ってほしいのです」

「BETA？なんだそれは？」

- 人類を滅亡の淵に追い込んだ異形の生命体、それがBETAです。
なお、BETAとは、Beings of the Extra
Terrestrial origin which is Adv
ersary of human race（人類に敵対的な地球
外起源生命）の略語です。現在
BETAは8種類います。 -

「ふん、ところで向こうの人間はどうやって、BETAに対抗し
ているんだ？」

- 向こうの世界には、人が開発した機体「戦術機」があります。 -

「戦術機？」

- 戦術機とは、対BETA用に開発された人型兵器のことです。 -

「へえ、MSみたいなものか？」

- MSよりかは、性能は低いですがそんなところです。 -

「なるほどな、大体分かった。つまり、その世界の奴らと手を組ん
でBETAとやらを、殲滅すればいいんだな。」

- はい、大体そんな感じです。 -

「だが、断る！！！」

- ええええええええ！！、何故ですか！？ -

神はあまりの驚きに聞き返す。

「俺は群れるのは嫌いだな。やるなら一人でやらせてもらう。まあ、ヤルことはやるさ。」

「うう、わかりました好きにしてください。それでは、さっそくですけど何か必要な物とかがありますか？BETAの数は半端ないですから、よく考えて決めてください。」

「んん、そうだな。まずは一つ目、ダブルオーガンダム（オーライザ つき）とゴッドガンダム（浮雲再起つき）で、機体はその場で自由に変えられるようにしてくれ。二つ目は、食いもん、腹が減っては戦はできないからな。三つ目は、向ここの世界についての情報をくれ。四つ目は、俺の基地を造ってくれ。」

「分かりました。それではいきますよ。」

海斗の体が光りだしたが、すぐに光は治まった。

「終わりましたよ。」

「おおー、色々と頭の中に入ってくる。へえ、これが戦術機の構造か。ん？白銀武とは誰だ？」

「そつえば言ってますでしたね。白銀武とはその世界の言わば主人公です。」

「ふうん、なるほどねえ。何回もループして世界を救おうとしてるのか。」

- はい。南の島の地下に基地を造りました、食料は基地の食料保管庫にあります。機体は格納庫に置いときます。後、ハ口を何体かと他に欲しい機体とうがありましたら基地に置いてるパソコンに名前を入力してください送りますね。-

「おう、サンキュー。これで準備万端だな！」

- それでは、逝く準備は出来ましたか？ -

「おうって、ちょっとまって！？行くの漢字が違うぞ！！」

- ガンバってください。
-

「人の話を聞けえええええ！」

叫んだ海斗が光に包まれ、輝きが増し光が納まった時、海斗は消えていた。

こうして彼の新たな物語が始まった。

プロローグ（後書き）

ぶっちゃけ俺の好きな機体しか出ません。続いたら、他の機体も出すかもしれませんが。期待せずにおまください。はっちゃけて書きましたがどうでしょう？っといっても、まだプロローグなんですけどね。

第一話（前書き）

ちょっと遅れました。勢いで書きましたが、後悔はしてません。たぶん。

第一話

〈第一話〉

9月22日

「んん」。ここが南の島……。なわけないやな。」

そこは辺り一面瓦礫の山だった。

「どこだよここ……。ん？」

少し歩こうとした時、海斗はポケットの中に違和感を感じ探ってみた。

「これは……。手紙か？」

海斗は不思議に思いながらも手紙を開いた。

「ゴメンナサイ!!」

「いきなり謝られましたよ。」

「そちらの世界に送ったのはいいんですが、間違っただけで違う場所へ送ってしまった。」

「おいおい」

「現在は帝国付近にいると思います。すいませんが、後は自力で基

地に向かって下さい、地図は手紙の中にいれますので。後現在は白銀武が来る一ヶ月前9月22日です。それでは頑張ってください。by神より -

「まったく、困った神様だぜ。」

文句を言いながら海斗は手紙から地図を取り出す。

「へえ、これがこの世界の地図か。俺の元いた世界の地図とたいしてかわらんなあ。」

そう言つて海斗は地図をジッと見ていた。地図には色々載っていたハイブの場所や基地の場所やその他の地名が載っていた。

「ふむ、ここが俺の基地の場所か。それなりに遠いな。はあ、まあ引き受けた以上やりますか。」

海斗は少し溜息をついた後、自分に気合を入れた。

「別に空飛んでいってもいいけど、少し主要人物に”挨拶”しているか。まだ本編に入っていないし。」

そう言つて海斗は口はしを吊り上げてニヒルな笑みをしていた。

「せんずはどこから行こうかなあ。」

鼻歌交じり地図を見ながら歩いていると突然目の前に影ができた。

「んあ？なんだ？」

そう言いながら顔を上げると。目の前に真っ赤な化け物がいた。

「……………はい？」

頭にはてなマークを浮かべていると、真っ赤な化け物が腕を振るってきた。

「うお！？」

ビックリしながらも海斗は、後ろに跳んで攻撃を避けた。

「こいつは確か戦車級^{タンク}だな。（確かこの世界での情報によるとこいつには生身で接近戦はしないほうがいいんだよな。）」

海斗はそう思いながら、戦車級の攻撃をかわしていく。そうこの世界の人間で武器も持たずに生身で戦車級に勝てる人間はいないだろう。

「だが悪いな、この世界の生身の人間ならさっきの攻撃で死んだかもしれないが……俺はこの世界の人間でもないしただの人でもないんでなあ！！」

叫んだのと同時に海斗は手に一本の刀を造りだし、戦車級の懐に潜り込み刀で胴体を真っ二つに切り裂いた。一瞬の出来事によって戦車級は倒された。

「何だこんなもんなのか？」

あまりの呆気なさに海斗はそつつばやきながら刀を鞘に収めた。

「こんなもんなら何体いようがたいした事ないな。はっはっはっはっ。」

海斗はそうやって笑っていると、後ろから物音がしそちらを見ると戦車級がもう一体いた。

「何だまだいたのか、お前も仲間同様真つ二つにしてやるよ。」

海斗がそう言い終わると同時に周りの瓦礫から数十体ものBETAが現れた。

「はん、まだこんなにいたのかよ。そういやBETAは集団行動で移動するんだっとな。其処らに、ウォーリアー
ソルジャー闘士級と兵士級も交じってやがる。」

そうBETAは集団行動を主に行っている。一体いれば数十体はいるだろうと、改めて海斗はそう理解した。

「クツクツクツ、まあいいだからこそ」

刀を鞘から抜き、周りに六本の魔力の槍を浮かせると同時に、BETAが襲ってきた。

「殺しがいがあるってもんよ!!」

そういつて、BETAに突っ込んでいった。

こうして彼の「夜神海斗」の新たな戦いが今始まる!!

第一話（後書き）

やっちゃったなあ。なんだこれ？って自分でも思いましたが、こんな感じにしか書けないのでどうか、優しく見守ってください。

第二話（前書き）

連続投稿！…っていうか、六話ぐらいまで書いてはいるんですけどねえ。ゆっくり載せていこうと思います。今回も、勢いで書きました。なんでこうなったんだ？

第二話

（第二話）

「ふう、これであらかた片付いたな。」

彼の周りを見渡せば其処にはBETAの死体の山で埋め尽くされていた。海斗は刀を鞘に収め、肩に担いで辺りを見渡した。

「にしても、派手にやりすぎたなこりゃ。早めにここから立ち去るか。」

そう言つてここから離れようとしたが、地響きが聞こえた。それはドンドン此処に向かってきていた。またBETAか？と思ったが、どうやら違うようだ。まだ少し離れているが此方に向かって来る機体が見えたので身を隠した。ということとは、BETAではなくこの世界にある戦術機だろうと判断した。このまま立ち去るかここに隠れてようか迷つてゐるうちに戦術機はすでに目の前まで来ていた。

「何だこの惨状は！？」

どうやらBETAの死体の山に戦術機に乗つてゐる奴は混乱しているようだ。戦術機はどうやら武御雷のようで、色は赤と白だ。それとどうやらレーダーかなんかに引掛つたのか向こうが俺に気づいたようだ。

「其処にいるのは誰だ！？」

俺は、このまま気配を消して立ち去るかどうか考えたが少し挨拶だ

けしとこうと判断した。

「どうもあゝ。」

「貴様は誰だ？それとこの惨状はなんだ！？答える！！」

無抵抗の意思の主張も込めて両手を上にあげて出て行ったのだが、向こうも混乱しているのか怒鳴りながら此方に銃を突き付けてきた。

「人の名を聞くときはまず自分からだろ？それとこいつらは俺が倒した。以上。」

「貴様ふざけているのか？この数を戦術機もなしに出来る筈がない！」

「お前の眼は節穴か？今日の前にBETAの死体の山が何よりの証拠だ。それといい加減に名前を名乗ったらどうだ？」

「………ツクヨミ月詠 マナ真那だ。」

「俺は夜神 海斗だ。それじゃ、サイナラ。」

そう言つて俺は何事もなかったさ「待て貴様。」「れませんでした。チクショー！」

「我々と一緒に来てもらおう。後、貴様に拒否権はない。」

「それでも嫌だと言つたら？」

振り返りながら俺は聞いてみた。

「悪いが、力づくで連れて行く。」

武御雷がこちらに銃を突き付けてきた。俺は笑いながら、返答した。

「ハハハハハハハハハハハハ、そんな機体で俺を倒せると思ってるのか？」

「試してみるか？」

どうやら俺の笑いが癪に障ったのか殺気をビンビン感じる。後ろにいる三機の白い武御雷も此方に銃口を向けてきた。

「しょうがねえな、相手してやるか！でろー！ガンダムー！！」

手を上に掲げて指を鳴らした。すると、何処からともなくゴッドガンダムが腕を組んで現れた！すげー、本当に来たよ。

「な、なんだその戦術機は！！どこから現れた！！」

向こうは急に現れたゴッドガンダムに驚いていた。そのうちに俺はコクピットに乗り移った。

「戦術機？そんなオモチャとこの機体とでは格が違う。」

「な！？我々の戦術機がオモチャだと！？」

「貴様！我々を侮辱するつもりか！？」

「フン、ならば実力の差を見せてやる。こい。」

ゴッドガンダムの人差し指を出し、「こいこい」と挑発した。

「ふ、ふざけるなあー！！！」

「まて、神代！」

「神代！」

「神代ちゃん！」

白い武御雷の一機が俺の挑発に乗って背中に付けてた剣を掴んで向かってきた。

「はあ！やあ！」

「やはり遅いな。」

相手は俺を切り裂こうとしてくるがそれを全て受け流しやギリギリの所を回避したりしている。やはりガンダムと違い、まったくもって遅い。よくこんなんでも生きてこれたな。

「なんでなんであたらないんだ！？」

「其れが貴様の全力か？所詮はこんなものか。」

「！？黙れー！！！」

怒りにまかせて剣を振ってくるそれには、先ほどと違い隙だらけだった。そろそろ潰すか。俺は上段からの攻撃を左手で掴んだ。

「なっ！片手で掴んだだと！」

「フン。はっ！」

そのまま掴んだ剣を右手で叩き追った。その折れた刃を武御雷の腹部に突き刺し、赤い武御雷の方に蹴り飛ばしてそのまま跳躍した。

「なっ、なに！と、跳んだだと！！」

「そんな！跳躍ユニットも使わずにこの高さなんて！？」

「あ、ありえないですわ〜！」

相手が驚いているうちに俺は腰についてるビームサーベルを抜き、二機の白い武御雷の間に入り回転しながら腕と足を切り裂いた。

「巴、戎、大丈夫か？」

「へ、平気です。」

「だ、大丈夫ですわ〜。」

「殺さなかっただけでも感謝するんだな。次は貴様だ。」

「くっ！なんだというのだその戦術機は！それにさっきの機動性はなんだ、跳躍ユニットも使わずにそのジャンプ力は！それとその腰に差している兵器はなんだ！」

「ゆったはずだ、貴様らのオモチャとは格が違うとな。それとこのMSはゴッドガンダムだ、戦術機ではない。」

「MS？ゴッドガンダム？なんだそれは？そんなの聞いたこともないぞ。」

「当たり前だ、この世界には存在しないのだからな。」

「何？どういう意味だ？」

「ここから先は俺に勝ったら教えてやる。いくぞ！」

そして俺は構えを取る、ゴッドガンダムの必殺技の一つ。胸部中央の装甲を展開し、内部のエネルギーマルチプライヤー露出され、そこにキング・オブ・ハートの紋章が浮かび上がり、背部の羽状が展開され日輪のような光の輪を発する。

「俺のこの手が真っ赤に燃える！」

「勝利を掴めと轟叫ぶ！」

「爆熱！！ゴッドオ！フィンガー！！！」

「くっ！はぁーーーーー！！！」

俺のゴッドフィンガーと武御雷の剣が一瞬ぶつかり合ったが、それもすぐに終わってしまった。

「な、なに！」

ゴッドフィンガーの出す高熱によって剣が溶けて折れてしまったのだ。

「うおーーーー！」

「し、しまった！」

折れた剣に呆然としてる隙に、ゴッドフィンガーで武御雷の頭部を掴んだ。さすがに殺してしまうのは悪いので、頭部を掴むだけにした。

「俺の、勝ちだ。」

「ぐっ。降参だ。」

そういつて頭部から手を離し、武御雷を解放した。武御雷はもう動かないだろう。相手がどうやらコクピットから降りてきたようなので俺も降りた。

「貴様、本当に何者だ？」

「俺は夜神 海斗だ。それ以上でもそれ以下でもない。」

「フッ。答えになってないがまあいいだろう。改めて名乗ろう、私は月詠 真那だ。」

「神代 巽。」

「巴 雪乃。」

「戒 美凧ですわ。」

「そうか。そんじゃ、俺はこれでサヨナラだ。」

今度こそ俺は振り向いて歩き出した。

「待て。」

「ぐへえ、ゲホゲホいたいなんだよ！いきなり首根っこを掴むなよ、苦しいじゃねえか！」

「す、すまん。すまないが私たちを帝都まで連れて行ってくれないだろうか？」

どうしようかなあ。はつきり言ってめんどくさいが、こいつらをここに置いとくとまたBETAが来るかもしれないしなあ。しょうがないか。

「わかった、帝都まで連れて行こう。ただし、拘束とかは勘弁だぜ。」

「わかった、感謝する。」

「そんじゃ行くか。」

俺はコクピットに戻り、ゴッドガンダムの手には彼女らを乗せ、そのまま低空で飛びながら帝都へと向かった。挨拶だけのつもりがこんなことになってしまふとはねえ。これから一体どうなるのやら。

第二話（後書き）

何だこの急展開は？自分で書いててもあれ？って思いました。戦闘描写もびみょーだなあ。誰か文才をくれませんか？

第三話（前書き）

遅くなりました！仕事が忙しくて大変です！死ねる！

第三話

〈第三話〉

やべえーな本気で逃げようかなどうしようかな。ん？なんで俺がこんなこと思ってるのかだって？それは現在進行形で政威大將軍に会うことになったからだよ。ぶっちゃけ言って煌武院^{コウフイン} 悠陽^{ユウヒ}だな。なんでこうなったんだろうなあ。

〈回想〉

俺は月詠に案内されるままハンガーに向かった。途中で色々と周りに注目されていたがな。一先ずハンガーに着いたので、月詠たちを手から降ろし、何か周りと話した後俺に向かって手招きしている。降りて来いということだろう。俺はコクピットを開け降りた。

「話はずいたか？」

「ああ。ここまで送ってもらったこと感謝する。」

「良いってことよ。そんじゃあな。」

去ろうとする俺の首根っこを掴む。だから苦しいっちゅうの！

「ゲホゲホ、今度はなんだよ！」

「い、いやその、ここまで送ってもらったお礼がしたいのだけどどうだ？」

「ん。そうだなあ、無下に断るのも失礼だし、有り難くお礼を頂戴しよう。」

「うむ。私は報告があるので誰かに案内させよう。では誰か案内でも「ワシが案内しよう」ぐ、紅蓮大将殿！」

「だれだおっさん？」

「ワシは紅蓮大将だ。お主の名は？」

「俺は夜神 海斗だ。よろしく。」

俺と紅蓮大将は握手した。周りの奴らが何か驚いているが無視しう。

「では案内しよう。月詠、殿下に報告して来い。」

「はっ！」

月詠たちは紅蓮大将に敬礼して去ってった。周りの奴らは俺のゴッドガンダムに群がっていたので、紅蓮大将に頼んで散ってもらった。

「にしても夜神、あの戦術機はなんだ？ワシでも見たことがないぞ。」

「あれは戦術機じゃない。MSだ。名前はゴッドガンダム。」

「MS？ゴッドガンダム？なんだそれは？」

「あんたらの戦術機よりも優れた機体とだけ言っておこうかな。」

「まことか？ふむ、では今度模擬戦をしようではないか。」

「別にかまわないが、手加減しないぜ。」

俺はちよつと悪戯っぽく笑った。すると紅蓮も笑いだした。

「はっはっはっ、それは楽しみだ！」

そんなことを話し合っている内にどうやら部屋に着いたようだ。

「それでは、ここで寛いでおれ。もう少ししたら月詠も来るだろう。」

「そんじゃお言葉に甘えて。ふう〜。」

言われたとおり俺は床に寝そべってリラックスした。紅蓮が何かおかしいのか笑っているが、問題ないだろう。少しだけ仮眠をとるか。ぐう〜。

30分後

「む、来たようだな。」

「ん？なにがだ？」

「月詠が。」

「お主そんなこともわかるのか？」

「彼女の気を探知しただけだ。」

「ほう、それほどの腕前か。模擬戦が楽しみだ、はっはっはっは。」

そして、ドアを開いたのはやはり月詠だった。

「報告が長引いてな遅くなった、すまない。」

「いや別にかまわない。それで何をくれるんだ？」

「うむ、そのことなんだが……。その前に殿下がお主を呼んでい
る。」

「なっ！殿下が！まことか月詠！」

「はっ、本当でございます。報告をしたついでに夜神のことを話したら興味があるようで、会って話がしたいので部屋に呼ぶようにと言われました。」

「おいおい、なんでそんなことになってるんだ？俺はお礼さえ貰えれば用は済むんだが。」

「すまないが殿下からのお言葉だ一緒に来てもらっぞ夜神。」

「うむ、殿下を待たせるのも悪い。急ぐぞ、夜神。」

そう言っ二人に両腕をつかまれた。は、はずれないだ！この俺が振りほどけないなんてなんていう力してやがるこの二人は！？

「ま、待て！お礼だけの話じゃなかったのか！？」

「確かに私はお礼だけのつもりだったが、殿下が呼んでるのであっては話は別だ。」

「観念せい、夜神よ。」

「いやだーーーーー!」

（現在）

もう諦めて二人の後ろについて歩いていく。二人に自分で歩くと言
って、はなしてもらった。さすがにあの恰好は恥ずかしい。

「ついたぞここだ。」

「無礼のないように気をつけろ。」

どうやら知らないうちに着いたようだ。気配消して逃げようかな？
そんなこと思ってるうちにドアをノックしてる。

コンコン

「殿下、夜神 海斗を連れてまいりました。」

「入りなさい。」

「はっ、失礼します。」

ドアが開かれてそこにはやはり煌武院 悠陽と侍女がいた。

「そなたが夜神 海斗殿ですね」

「ああそうだけど、用件はなんだ？お礼さえ貰えれば俺はいいんだが。」

「無礼者！殿下に何という口のきき方！」

「よい。下がっておれ。」

「くっ！はっ。わかりました。」

俺の口の悪さに侍女が怒鳴ってきたが煌武院 悠陽は特に気にしていないようだ。後ろの二人はなぜか溜息をはいている。何か悪いことしたか俺？

「それで用件は？」

「はいそれは、月詠をここまで送っていただいたお礼と、貴方が何者かお聞きしたくてお呼びしました。」

「そうだな、俺はこの世界とは違う世界から来た。つとでも言うっておこうかな。」

「違う世界ですか？」

「ああ、これ以上は言えん。」

「そうですか。月詠に聞いたのですが、貴方の乗ってた戦術機いえMSでしたね。その力をどうか我々に貸してくれないでしょうか？」

「断る。」

「「「なっ!!」」」

どうやら俺が断ったことに三人はおどろいているが、煌武院 悠陽は表情を変えずに聞いてきた。

「それは・・・なぜですか？」

「たんに俺が群れて動くのが嫌いなだけと軍隊が嫌いなだけだ。俺は強いから一人でも十分奴らと対等、いやそれ以上に戦える。」

「確かにそうかもしれませんがね。武御雷を手玉にとるような機体性能と聞きました。」

「ならこの話は終わりだな。とっととお礼をもらって帰らせてもらうぜ。」

「貴方はどこかに所属しているのですか？」

「言ったはずだ俺は軍隊が嫌いだと。自分の基地に帰るだけだ。」

「「「!」」」

おゝ、驚いてる驚いてる。やっぱり個人で持ってるのはすげーよなあ。

「そ、それは貴方個人の基地があるという事ですか？」

「ああ。南の島あたりに基地がある（まだ一回も言ってないんだけ

どな）。
「

その言葉でさらに驚く四人。驚いてばっかだなこいつら。

「どうしても手を貸してはくれませんか？」

「ん〜。じゃあこうしよう紅蓮と俺が戦って、紅蓮が勝てば手を貸してやる、負ければ俺は自由にさせてもらう。それでどうだ？」

「紅蓮構いませんか？」

「こちらとしてはお願いしてたところです。夜神、貴様の實力見せてもらうぞ。」

「こつちもさっき言ったとおり手加減しないぜ、殺す気がかつてきな。」

こつして俺と紅蓮の模擬戦（死合い）が始まる。

第三話（後書き）

ん。もうちょっと違う風に書くつもりだったのですが、こうなってしまう。

第四話（前書き）

ヤバい！誰かアドバイスください！

第四話

〈第四話〉

「フツ。お主とこんな形で模擬戦を行なうことになるわな。」

「まあ、いいじゃねえか。これでお前が勝てば俺はあんた達に手を貸すんだからよ。」

「そうだな。結果がどうあれいい勝負ができることを願おう。」

今俺と紅蓮はゴッドガンダムと赤い武御雷に乗って睨みあっている。いつでも始められるように両者構えを取る。

「両者、準備はいいですか？」

「ああ、いつでもいいぜ。」

「此方も同じだ。」

「それではいきます、始め！」

「うおーーーーー！」

「はあーーーーー！」

ゴッドガンダムの拳と武御雷の剣がぶつかり合い火花を散らす！

「ぬん！はあっ！」

「はっ！たあっ！」

武御雷からの剣戟をゴッドガンダムは拳で払い受け流して剣筋をずらしている。

「はっはっはっは、やはりやりおるな夜神！だが防御だけでは、ワシには勝てんぞ！」

「そういつあんたこそやるな！それじゃあお言葉に甘えて、今度は此方から行くぞ！」

拳で払い受け流すのをやめて、俺は攻めに出た。

「はあっ！」

「ぬう！」

俺は一瞬で武御雷の懐に入り頭部に一撃いれた後横に切り返してきたのでしゃがみ足を払った。

「はっ！」

「ぬ、しまった！」

武御雷が倒れた隙に俺は天高くに跳び、跳び蹴りの構えをとった。

「てりやああーーーー！！！」

「くっ！なんの！」

武御雷が横に転がって俺の跳び蹴りをかわしたが、俺が蹴った地面にクレーターができていた。

「今のを避けるとわな。確実に決まっと思ったんだが。」

「まだまだこれからよ、これほど楽しい勝負をそう簡単に終わらせてたまるか。」

俺たちは同時に笑った。久しぶりだこんなに熱く戦ったのは。だからこそ、俺はこいつを本気で倒す！

「あんたに一言謝っておこう、すまない。」

「なんだいきなり？」

「何あんたを甘く見ていたことと、戦術機をオモチャ呼ばわりしたことにたいしての謝罪だ。」

「ほう、確かにお主の機体を見ていると戦術機がオモチャに見えるかもしれぬな。」

「だが、ここからは、本気で行かせてもらっ！いくぞ、ゴッドスラッシュタイプーン！！」

俺は腰についてるビームサーベルを抜いて回転しながら武御雷に一気にちかよった。

「はあっ！！」

「ふん！」

今度はゴッドガンダムのビームサーベルと武御雷の剣がぶつかり合うが、さっきと違い武御雷の剣がビームサーベルに両断された。

「何という切れ味だ！」

紅蓮は一瞬で剣を断ち切られたことに驚いていたがすぐにもう一本の剣を掴み、俺に振りおろした。

「はあっーーーーー！！！」

俺たちの機体が交差してそのまま通り抜け、振りぬいた格好で止まった。

「「「・・・・・・・・・・」」」

周りはその光景に静まるしかなかった。そして最初に動いたのは紅蓮が乗っている武御雷だった。

「この勝負」

「・・・ああ」

「貴様の」

「俺の」

「「勝ちだ」」

その言葉を発した瞬間、武御雷の腕が落ちまるで糸が切れたように倒れた。そして長き模擬戦は海斗の勝利で幕を閉じた。その後俺たちは、いったん部屋に戻った。

「素晴らしい模擬戦でした。紅蓮も満足しているでしょう。」

「ああ、俺も楽しめたし満足だ。」

紅蓮は怪我をしてないが一樣医務室に連れて行かれた。

「そんじゃ、約束は守ってもらっぜ。」

「・・・その件ですが、夜神殿我々に力を貸してはくれないでしょうか？」

「それは断ったはずだ、それに約束は約束だちゃんと守ってもらっぜ。」

「・・・わかりました。それでお礼の件ですが、なにがいいですか？」

「そうだなあゝ、そんじゃ飯でも食わせてくれそれでいい。」

「そ、そんなことでよろしいのですか？」

「おう。うまい飯を期待してるぜ。」

「わかりました、すぐに持ってきてさせましょう。」

そう言っ侍女に持ってくるように言っている。この世界の飯は初

めて食うからちよつと楽しみだ。

「あつ、そうだこれを渡しておこつ。」

「？なんですかそれは？」

「これは俺の連絡先だ何かあつたら連絡しろ。」

俺は煌武院につて言いにくいな悠陽でいいか。んで悠陽に連絡先を書いた紙を渡した。何やら驚いた顔をしている。

「えっ？ええ！で、ですが力を貸してはくれないのでは？」

「ん？確かに軍隊に力を貸すつもりはねえが、あんた個人になら力を貸してもいいぜ。」

「・・・どうして私に力を貸して下さるのですか？」

「あんたのそのまっすぐな目が気に入ったのと、なにより美人なあんたの頼みだ俺の力でよければ貸してやるよ。」

「び、美人！？そ、そんな私など。／＼／＼」

顔赤くしちやって、かわいいねえ。チクショー！

「・・・・・・・・・・」

そしてこっちの月詠はどうして俺を睨んで来るんだ？そんなことを思っているうちに飯が来たようだ。持ってきた量からして悠陽たちも食べるのだろう。

「殿下お持ちしま、どうされました殿下、顔が赤いんですぞ?」

「え?へ、平気です。なにもありません。／＼／＼」

だいが冷静になってきたのか、元の表情に戻ってきた。だが、俺と目を合わせるたびに頬を赤く染めて目を逸らす。そしてその度に月詠に睨まれる。何この空間?

「そ、そんじやいただこうかな。」

「そ、そうですね、冷めないうち戴きましょう。」

「・・・はい。」

俺はこの空気から逃げる為に、話題を変えた。さて飯はサバ味噌定食か。では一口^{バグ}目。

「・・・」

「もぐもぐ。どうかされましたか夜神殿?箸がとまっていますよ。」

「夜神どうした?サバ味噌は嫌いだったか?」

「・・・ま」

「」「ま?」「」

「不味い!!」

あまりの不味さに俺は叫んだ！なんだこの不味いのは本当にサバ味噌か！この世界ではこんな不味いのを毎日食っているのか？

「そ、そんなに不味いでしょうか？いつも食べてる合成サバ味噌定食の筈ですけど。」

「はい。いつもと同じ合成サバ味噌定食の味です。」

「合成、サバ味噌定食だと？なぜ普通のサバ味噌定食をださない？」

「「「え？」「」」

ん？なんか変なこと言っただか俺？ただ普通のサバ味噌定食をだせと言っているだけなんだがな。

「な、なんだ、なんか変なこと言っただか俺？」

「夜神、今の食料事情を知らないわけではあるまい。」

「何だそんなに悪いのか？」

悠陽達が驚きながらも食料事情について教えてもらったところ、日本だけではなく人類そのものが食料事情は二極化しているらしい。BETAの侵攻による国土の荒廃や就農入口の激減により食料生産力が大幅に減少しているようだ。

「なるほどな。だから合成食なのか。」

「はい。本当に知らなかったのですね。」

「ですがそれでしたら、今まで何を食してきたんですか？」

「ん？そりゃ普通の飯だけだ。」

「「「！？」」」

「そ、それはほんとうですか！？」

「あ、ああ。なんなら見せるぜ。」

「「「え？」」」

俺はそう言っつて、俺が食料とかを保存している異空間からリンゴを取り出し、それを悠陽に渡す。（食料とかは腐らないように時間を止めている。）

「ほれ、これが証拠だ。」

「い、今どこから出したのだ？」

「それは後で説明する。ああ、ちゃんときれいだからそのまま食べても大丈夫だ。」

「そ、それではいただきます。」

「どうですか殿下？」

「お、おいしい！本当にリンゴです！」

「「「！？」」」

悠陽の言葉に二人が驚いている。悠陽もおいしそうに食べている。

「それで夜神、そのリンゴをどこからだしたのだ？」

「俺が創った異空間に食料とかを色々保存してんだよ。そこから取り出した。」

「い、異空間、ですか？そんなことできる夜神殿、貴方は本当に何者ですか？」

「そうだな、俺はこの世界とは別の世界から来た。っとまではいつたな。」

「はい。」

「うむ。」

「そのまんまの意味俺はこの世界とは違う、いわゆる異世界からきた。そこには魔法があったり気というものもある。争いがないとは言わんが、まあこの世界よりは平和な世界からきた。」

「そ、そうなのですか。」

「ん？あまり驚かないのな。」

「いえ、十分に驚いていますが有り得なくもないのです。」

「どういうことだ？」

どういうことだ？俺以外にもこの世界に来た奴がいるとでも言うのだろうか？

「横浜基地にいる香月博士という人がいまして、香月博士が論文でだした因果律量子論で説明がつきます。」

「なるほどな。詳しい話はその香月博士に聞くとするかな。」

「そうした方がよろしいでしょう。」

「それじゃ、そろそろ帰るかな。」

「そうですか。夜神殿「海斗でいいぞ」わかりました。それでは悠陽と呼んでください。海斗、また来てくださいね？」

「ああ、また来るよ悠陽。」

「・・・／／／／」

「ん？どうした、顔がまた赤いぞ？」

「い、いえ初めて名前で呼ばれたもので。」

「そうか。ん？」

「・・・・・・」

うわー。月詠がめちゃくちゃこつちを睨んでくるよ。

「夜神、いや海斗。私も名前で呼べ。」

「別にかまわないけど、いきなりどうした？」

「殿下が許したのだ、ならば私の名を呼ぶことを許そう。」

「いや別に月詠でも（ギロリ）わかったわかった、そう睨むな。」

俺は小さく溜息をついた。そんで月詠をまっすぐに見て。

「真那、これでいいか？」

「う、うむ。それでよい。／＼／＼」

なんか真那も顔を赤くしている。なんでさ？

「そうか、それじゃ元気だな。」

「はい、またいつか。」

「うむ、またな。」

そう言っただけ俺はハンガーに向かいゴッドガンダムのコクピットに乗り込み帝都からでた。そして俺は南の島にある俺の基地にまっすぐに飛んで行った。

第四話（後書き）

なんだこれ？なんでこんな話になったんだ？誰か教えてえー！

第五話（前書き）

ヤバい次の話ができてない。誰でもいいから、文才をください！

第五話

〈第五話〉

あれから俺は無事に南の島に着いた。しかし、何処に基地があるんだ？周りは森しかないぞ！俺は一旦コクピットから降りて、周りを散策すると滝を見つけた。まさかなあ。そう思った俺だが一応調べてみた、するとレバー見たいのがカモフラージュされているが見つけた。俺はそれを下に引いた。すると滝が二つに割れたので俺はその中にゴッドガンダムを入れた。すると下に降り出した、このエレベータで地下にある基地に行けるようだ。俺はゴッドガンダムをハンガーにいれたとき、ハロがいたので後は任せた。そのうちに俺は自分の部屋に行きこれからのことを考えた。

「さて、これからどうしようかなあ。」

独り言を言いながら考える。・・・考えた結果やっぱり重要人物にだけ挨拶に行こうと考えた。一応TEの重要人物にも会う事しよう。

「さて予定は決まったが、その前にこの基地のことをちゃんと調べないとな。」

俺は自分の部屋から出て、色々見て回ることにした。

「最初はどこにいこうかな？」

部屋に置いてあった小型携帯端末機にこの基地のデータが載っていたので持ってきた。これがあればこのやけに広い基地でも迷う事は

ないだろう。そして最初の部屋に着いた。

「ここは、ブリーフィングルームだな。」

この部屋は結構広いな。それに一人だけしかないせいかととても孤独に感じる。

「・・・・・・・・・・次に行こう。」

誰か連れてこようかな？別に誘拐するわけではないぞ！ただ、悠陽達でも連れてこようかなと思ったただけだぞ。ホントだから！俺は誰に言ってるんだろ？まあいいや、次々。

「食堂だな此処は。」

ここも無駄に結構広い。一人しかいないのになんでここまで広いんだ？まあ、それは後でいいや。帝国で食い損ねた飯を食うか。

「ハロハロ。」

どうやら調理もハロがしてくれるそうだ腕がついてる機械に乗って調理しているが、食えるものが出てくるのだろうか？コックがつけるような帽子をてっぺんにのせているが心配だ。

「出来タ出来タ。」

どうやら出来てしまったようだ、覚悟を決めよう。いざ！

「う、うまい！」

「ハロハロ」

なんだ普通にうまいぞ。心配する事なかったな。美味いと言ってもらって嬉しいのかピョンピョン跳ねている。これ食べたら次はどこに行こうかな？

・
・
・
・
・

「色々回ってるうちに時間が結構たったな。」

そう言いながら小型携帯端末機の機能についている時間を見るともう外は夜である。この基地無駄に広すぎ、小型携帯端末機がなかったらぜったい迷ってるな。うん。さて回り終わったしそろそろ寝るかな。そう思いながら、俺は自分の部屋へ歩き出した。

「ふう、今日は疲れたなあ。」

俺は部屋に着いた途端ベッドにダイブした。ベッドで俺は今日会ったことを思い返した。

「真那に出会い」

「紅蓮に出会い」

「紅蓮と模擬戦をしたり」

「悠陽と出会い」

そういえば不味い飯にも出会った？なあ。そんなことを思い返し
ながら、眠りについた。

・
・
・
・
・

「カイトオキ口、カイトオキ口。」

「ん。朝か。」

おれは八口の声で目を覚ました。

「何か用事が八口？」

「アサメシアサメシ。」

「朝飯？そのために起こしてくれたのか？」

「八口八口。」

「サンキュー。」

お礼を言いながら八口を撫でた。さてせっかく用意してくれた朝飯
が冷める前に食堂に行くかな。

「おお。朝飯は、ご飯と味噌汁と納豆と目玉焼きにウィンナーか。まあ、普通の朝飯だな。」

俺は豪勢な料理より普通の一般的な料理が好きなのでハロ、グッジョブ！それじゃ、いただきますと。

「やつぱうめえ。目玉焼きは半熟がいちばんだなあ。」

あまりの美味さに何回かお代わりしてしまった。

「さてと、おいしい飯もたらふく食ったし、横浜基地に出向（強襲）しますかな。」

白銀の強さも調べたいが、まだ来ないから我慢しよう。その代わり、A-01（生贄）がどれくらい強いか確かめよう。紅蓮ほどとまでは言わないが、それなりに楽しめ、ゲフン、ゲフン！強ければいいな。今回はダブルオーガンダムで出よう。ん？なんでダブルオーガンダムなのかって？気分だよ気分！

「カイトカイト」

「ん？なんだハロ？」

「オベントウオベントウ」

マジか！ここのハロ達は気がきくなあ。

「サンキュー、ハロ。お昼に美味しくいただきませ。」

「ハロハロ」

「そんじゃ、ハロ、いつてくるな。留守番頼んだぞ。」

「リヨウカイリヨウカイ」

俺はハロに基地をまかせてハンガーに向かう。ハンガーにはすでにゴッドガンダムからダブルオーガンダムに変わっていた。俺は早速、ダブルオーガンダムのコクピットに乗り込み起動させる。それと同時にハッチが開き地上へと出る道ができた。どうやら、出る道と入る道は別々のようだ。

「よし、いくか。夜神 海斗でるぞ!」

さあ、いこう。魔女とその仲間達に会うために。

第五話（後書き）

短い相変わらず。挫けそうだ。

第六話（前書き）

遅くなりましたが、投稿します。最後におまけを書いてみましたが、ちよつと書いてみたかっただけなので、短いですけど良かったら読んでみてください。

第六話

〈第六話〉

ダブルオーガンダムに乗って横浜基地に向かっている途中。なぐんぐだが、向かっている途中にBETAにであいましたあ。イエーイ！！ってなんでだーーーー！！なんでこんなところにBETAがいんだよ！！

「めんどくさいがヤルか。ガンダム使つての初めてのBETA戦だ、俺を楽しませろよBETAども！！」

俺はGNソード？を両手に持ち、BETAに突っ込んだ。まず目の前にいる敵を殲滅する！突っ込んできた、要撃級を斬り伏せ、ライフルモードで突撃級を撃ちぬく。デストロイヤー数はざっと3000ってところかな？どんどんいくぜえー！！

「そらそらそら！」

俺は武器をライフルモードにしたまま、飛んだままビームを撃ちまくった。レーザー種がないから落とされることはないだろう。たまに、ソードモードにして、要撃級と突撃級を斬り伏せ撃ち抜いていく。これくらいならランザムも使うほどではないな。

突っ込んできた、突撃級を撃ち抜く。

「そこおー！」

要撃級の頭部を切り裂く。

「邪魔あー！」

フォート
要塞級の触手を切り裂き、胴体を斬り伏せる。

「おらあー！」

こうやって小型種から大型まで倒して行っているが。

・
・
・
・
・

三十分後

「うっぜえー！ー！ー！ー！」

なんだよこいつら！？Gですか？ゴキですか！？うじゃうじゃ湧いて出てきやがって……。トランザム使おうかなあ……。でも使ったら負けた様な気がするしなあ……。けどいい加減に、横浜基地に行きたいからなあ……。こんなことなら、火力主体の機体に乗ってくればよかったかな？いっそこいつらを無視して、横浜基地に行こうかなあ。

そう愚痴をもらしながらも俺は黙々と奴らを倒して行く。あつ、地中からも出てきた。く・そ・がぁー！ー！ー！ー！

・ ・ ・ ・ ・

一時間後

「これで・・・ラストーーーーー!!」

俺はGNソード?のソードモードで最後に残っていた、要撃級を切り裂いた。お、終わった!!やつとこさ終わった!!あれからさらに一時間も戦い続けてやつとこさ全てを倒し終わった。これでやつと、横浜基地にいける。そう思って俺は、ダブルオーガンダムを横浜基地に向けて再び進もうと思ったたらレーダーに反応があった。

「なんだ?またBETAか?はあゝ。」

俺は溜息を吐きながらレーダーをチェックした。ん?どうやら今度はBETAではなさそうだ。これは・・・戦術機だな。この方向からだと、横浜基地から送られてきた戦術機かな?まあ、いいや。来るのは四機か。ここに向かってきてるようだし待つておくか。音楽でも聴こうかな。

数分後

「その戦術機!!この惨状はなんだ!??」

ん?来たようだな。小型携帯端末機に入ってた曲を聴いてるうちにご到着のようだ。戦術機は・・・不知火、か。それにあのエンブレ

ムは、伊隅ヴァルキリーズだな。グッドタイミングってやつですか？—先ず先に返答しないいな。

「この惨状はなんだと言われても、BETAがいたから倒しただけと、その死骸としか言えないのだが。」

「ならば所属している部隊はどこだ？後、その戦術機はなんだ？そんな戦術機見たことがないぞ。」

この声は多分、伊隅みちるの声だな。さて、なんて答えようかな？—応、帝国とでもいうか？ダブルオーガンダムについては開発中の機体とでもいうことにするか？悩ましいなあ。いっそ、別の世界から来ましたつとでも言うか。

「俺はどこにも所属していないし、この機体については、喋るわけにはいかない。」

「貴様は、ふざけているのか？貴様を横浜基地に連行する。」

「怪我しないうちに降参した方がいいわよ。」

今度は、別の声まで混ざってるな。この声は、速瀬水月の声だな。にしても、なんでこいつらこんなに余裕なんだ？このBETAの惨状を見ても俺に勝てると思ってんのだろうか？クッククッククック、たかが不知火如きで、俺も舐められたもんだなあ。

「クッククッククッククック。」

「何だ気でも触れたか？」

「この状況に気でも狂ったのでは？」

「そのようですね。」

今度は、宗像美冴に風間禱子の声も聞こえた。やはりこの部隊は伊隅ヴァルキリーズのようだ。ならば、ヤルことは決まっている。

「なあ、あんたら伊隅ヴァルキリーズだろ？」

「！？なぜ我々の部隊のことを知っている！！」

「さあ？なんでだろうなあ。」

「・・・まあ、いい。基地に着いたらたつぷりと時間がある。あとは、基地に着いたら話してもらおう。」

「・・・おまえらさ、俺に勝てると思ってんのか？」

俺は一応彼女らに聞いてみる。

「アンタこそこの状況を見て勝てると思ってんの？」

そう言つてこちらに突撃砲を向けてくる四機。それに対して俺は腰につけているGNソード？を掴み。

「ああ・・・勝てるぜ。」

俺は、そういつた瞬間に速瀬水月に斬りかかった。

「「「「！？」」」」

「おらああああ！」

「くっ！」

瞬時に突撃砲から背中に付けてある長刀に持ちかえて、俺の攻撃をギリギリ防いだ。俺はすぐに相手を蹴飛ばして、相手の機体はバランスを崩してしまい、後ろに倒れてしまう。

「しまった！？」

「まずは・・・一機目。」

そういつて、速瀬水月が乗る不知火を踏みつけ、両方の腕部を斬り落とし、頭部にGNソード？を突き刺した。

「次は誰だ？」

「くっ！通信が急にできないぞ！なんでだ？しかたない、宗像、風間！接近戦は控えろ！遠距離攻撃を主にしろ！」

「了解！」

通信が使えないのに気づいたようだ。オープン回線に切り替えたようだ。さすが隊長殿だけはある、それに瞬時にこたえるとは、情報道理この部隊は中々良い部隊だな、伊隅ヴァルキリーズ。

「だが。」

俺はソードモードをライフルモードに変えて、狙いを定めトリガー

を、引いた。放たれたビームは、宗像美冴の機体の右腕を撃ち抜き、風間禰子の機体は頭部を撃ち抜かれていた。

「『なっ!!』」

「悪いがこのGNソード？はソードモードからライフルモードに変えて、遠距離攻撃もする事ができるんだよ。残念だったな。」

少し説明？してやったが、わかっただろうか？なんか動きが止まっているのだが、どうしたんだろうか？機体に不具合でもあったのだろうか？

「貴様。今のアレはなんだ？」

「アレ、とは？」

「今のピンク色の光は、なんなのかと聞いている！？そんな兵器・・・見たことも聞いたこともないぞ!!」

伊隅みちるが此方に怒鳴ってくる。ああ、そういうことね。この武器・・・GNソード？に驚いているのか。そういえばこの世界にはビーム兵器が存在しないんだっただな。

「このピンク色の光はビーム兵器だ。」

「『な!!』」

「な、何故そんなものを貴様が持っている!!」

「フン。貴様らが知る必要はない。」

そう言つて俺は、再び相手に攻撃を再開した。だがそれも一分もかからずに終わってしまった。宗像美冴の機体の今度はもう片方の腕部を斬り落とし、脚部に突き刺し、コクピットを外すように腹部にGNソード？を刺した。伊隅みちるの機体は、この部隊の中で一番もった方だが、それでもすぐに決着はついた。チャージショットで両腕を撃ち抜き、頭部を撃ち抜いて終わった。今は伊隅みちるの機体の腹部を踏みつけている。

「くっ、なんて強さだ！」

「あんた！本当に何よ、その戦術機は！？」

「・・・前にも言ったが、話すつもりはない。なぜなら貴様たちはここで・・・。」

言いながら再びGNソード？を、ライフルモードからソードモードに切り替える。

「死ぬからだ。」

「「「「！？」」「」「」

「この機体の情報を他にばらされては困るんでな、運が悪かったと思え。」

言い終わると俺は、GNソード？を踏みつけている不知火・・・伊隅みちるのコクピット目指して突き刺すように振り下ろした。

「なんてな。」

「「「「は？」「」「」

俺は踏んでいる不知火から、GNソード？と足をどける。

「冗談だよ、冗談。別に俺にあんたらを殺すつもりはないよ。」

「「「「「・・・。。」「」「」

「・・・なぜ私達を生かす？情けのつもりか？」

「はあ。別に俺はあんたらを殺す理由がないから殺さないだけだ。あつたら別だけだな。」

「「「「「・・・。。」「」「」

はあ。無言になっちゃった。どうしようかねえ、この空気をどうにかしなくては息が詰まってしまうな。そういえば、こいつら倒してしまっただけ、どうやって帰るのだろうか？

「なあ？」

「・・・なんだ？」

あまり元気はないようだ。まっ、俺のせいですけど何か？

「あんたら、どうやって横浜基地に帰るんだ？」

「「「「・・・あ。「「「「

「「「「「。。。」

「「「「「。。。。。「「「「

無言が続く。

「す「いいぞ。「・・・まだ何も言っていないのだが？」

「横浜基地に送って行けばいいんだろ？」

「あ、ああ。そうだが、いいのか？」

「俺もそこに用事があってね。あんたらを連れていくついでにな。」

「・・・それはどんな用事だ？」

ん？なんか警戒されてるな。まあ、そんな状態で警戒されても意味ないと思うけどな。

「ちょっとばかり、あんたらの上司に話があつてな。安心しろ、本当に話があるだけでそれ以外は向こうが何もしてこない限り、こちらも手は出さない。」

「・・・わかった、信じよう。」

あら？えらくあっさり信じてくれたな。まあ、こちらとしては話が

早くていいんだけどな。

「そんじゃ、四人ともコクピットから出て、手の上に乗ってくれ。」

「わかった。」

そう言つて四人とも出てきて、手の上に四人が乗る。なんかデジャブを感じるな。

「そんじゃあ、いきますか。」

これでやっと、横浜基地に行ける。これから先どんなことが待ち受けているのかねえ。まあ、まずは魔女とのご対面だな。その後は・・・その時にでも考えるところ。

おまけ？

私たちは今、目の前に浮いてこつちを見据えている戦術機？に恐怖していた。その戦術機は、異様に伸びた四肢と細身のフォルム。頭部にある目が四つついていて、赤い光をまき散らし、血のように真っ赤なカラーリングも相まって、他の戦術機とは違いとてつもない恐怖を感じている。

「なあ、あんたら伊隅ヴァルキリースだろ？」

「・・・だつたらなんだ？」

伊隅隊長が絞り出すように言葉を返す。

「殺しがいが、あるつてもんよ!!」

そう叫んだと同時に此方に向かって大きな剣を振りかざして襲いかかってきた。それを私は背中に装備していた長刀で何とか防ぐ。

「くっ、あんたは一体なんなのよ!？」

「俺は俺だあー!!」

なによこいつは!？なんなのよ!!そんなことを思っているうちに私は長刀が真つ二つに斬られ、そのまま両腕も斬り落とされる。

その後は、伊隅隊長も宗像も風間もまるで遊ばれているように、次々にやられてしまった。でも、誰も死んではいなかった。どうやらこいつは私たちを殺すつもりはないようだ。すると向こうから通信が来た。

「何だ、たいして強くもねえな。」

私はそのあまりにも舐められたその言葉にとてつもない屈辱と敗北感。コイツのあまりの強さに。この戦術機の脅威に。私は再び恐怖を感じた。

「ところでよ、あんたらの大将に言っておいてもらいてえーことがあるんだけどよ。」

「・・・なんだ？」

「俺を傭兵として雇わねえか?って聞いておいてくれ。それだけだ。連絡はここにしてくれ。じゃあな。」

そういつてあの戦術機は赤い光をまき散らしながら、去っていく。

こうして、赤いMS・・・アルケーガンダムとそのパイロットは魔女に雇われて、仲間？とともにBETAどもと戦って行くのはまた別の話であった。

第六話（後書き）

やっちゃったぜ！ノリで書いてみたけどキツイな、なんか。

第七話（前書き）

久しぶりの投稿です。本当に久しぶりに戻ってきたなあ。感想を書いてくれた人たちは、とても勉強になりました。また何かアドバイスでもあれば、書いてくれると、ありがたいです！では、つまらないかもしれませんが、どうぞ！

第七話

〈第七話〉

あれから俺はヴァルキリーズの四人を連れて横浜基地に向かった。ヴァルキリーズのおかげですんなり横浜基地の格納庫に入ることができたまでは良いのだが、なんか下で武装した集団が待ち構えてるんですけど、どうするかなあ？そんなことを思っていると、一人の女性がマイクを持ってこちらに呼びかけてきた。

「その機体についているパイロット、すぐに出てきなさい。」

「・・・なんかそんなこと言っているが、そんな武装した奴らがいたら、降りたくもないんだが。まっ、これくらいの奴らに負けるわけはないのだから。しょうがない、降りるとするか。」

「了解、今から降りるからその武装集団をどうにかしろ。」

「・・・わかったわ。」

そう言って手を上げると周りにいた奴らは武器を下げた。さて降りますか。俺はコクピットを開け、・・・飛び降りた。

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」

驚いてる奴らに構わず俺は地面に静かに着地し、マイクを持つてる女性に話しかけた。

「ほら、降りてきたぞ。」

「え、ええ。」

「んでなんだ？何か話でもあるのか？」

「そ、そうね。ついてきなさい。」

そう言って歩き出す女性。俺はその後ろについていく。

エレベーターに乗ったりして移動していると一つのドアの前に着いた。

「ここに、入りなさい。」

「はいはい。」

俺は返事をしながら部屋に入ると後頭部に銃を突き付けられた。

「……どういふつもりだ？」

「あんたには色々と聞きたいことがあるのよ。答えてもらっわよ。」

そう言っとう少女が入ってきた。

「なあその子は「質問するのはこっちよ。」はいはい。」

俺は女性にそう返事をして、目でどうぞと答えた。

「まずは、あんたの所属と目的。次に、あの戦術機はなんなのか。そして最後に、あんたは何者か。」

「ん」。まず初めに俺はこの国にも部隊にも所属してはいない。目的は、秘密。次にあの機体は戦術機ではないMSだ。名前はダブルオーガンダム。んで最後に俺のことだが、名前は夜神 海斗だ。以上。」

「……………あんたふざけてるの?」

「さあ?どうだろうな。」

「……………社。どう?」

社?神からもらった情報にそんな名前があったな。ということは、この女性が香月夕子か?なんか二人だけで話しているが隙だらけだな。いい加減イライラしてきたし抵抗するか。

「なあ、いい加減に銃をしまってくださいないか?」

「…………それはできない相談ね。あんたがなんの目的があってきたか教えてくれたら、考えてあげるわ。」

考えるだけで、銃は下げないつもりだろう。それなら俺もそれ相応の態度で示そう。そう思考した俺は一瞬で手に刀を造り振り返りな

がら下から上に向かって銃を切り裂き、相手の首に添えた。

「なら俺も、あんたと後ろの少女について教えてくれたら、話してやってもいいぜ。」

「・・・くっ！」

うわぁ、めちゃくちゃ睨んでくるよ。そんなんじゃ美人が台無しだな。後ろの子はじいーーーーっってみてくるだけで何も言わないからよくわからないが、この子からは何かを感じるな。

「「「・・・。。。」」」

おおーい。何か言ってくれないか？さすがに空気が重いなぁ。そんなことを思っているとやっと向こうから話し出した。

「・・・わかったわ。何が聞きたいの。」

「それじゃ、まずは名前。次に後ろの少女の名前。他は・・・特にないな。」

「・・・それだけ？」

「それだけだが？」

「「「・・・。。。」」」

な、なんだこの雰囲気？別に神にこの世界の情報は記憶してるから特に他に聞くことはないのだが、どうするべきか。そんなことを思っていると服を引っ張られる感じがしたので、引っ張ってる方を向

くと、社が服の端をつかんだ状態でこちらをじーーーーっ
てくる。なんだかよくわからんが、一先ず自己紹介をしよう。まあ、
知ってるんだが一応聞いとう。

「初めまして。さっき言ったが俺の名前は夜神海斗だ。君の名前は
？」

「・・・社 霞です。」

「そうか。いい名前だな。」

俺はそう言って頭を撫でてやる。社の頭を撫でた後、香月夕子の方
を向いた。

「それであんたの名前は？」

「・・・はあ。香月 夕子よ。」

「そうか。そんじゃ、俺の質問に答えてくれたので、俺もあんたら
の質問に答えよう。何から聞きたい？」

置いてあるソファーに座りながら聞いた。香月も社も俺がソファー
に座るのを見て前に置いてあるソファーに座った。

「さっき聞いた事について答えなさい。」

「さっき聞いたことって、俺が何者かと言う奴か？」

「ええ、そうよ。早く答えなさい。」

まあ、隠すほどでもないから本当のことを言うか。

「まずは、さっきも言ったが名前は夜神 海斗だ。偽名でも何でもないからな。次にあの機体はMSといって戦術機ではない。名前はダブルオーガンダム。次に……。」

「待ちなさい。」

「ん？なんだ？」

「あのせん「MSな。」そのMSっていうのはなんなの？」

そこから説明か。めんどくさいな、簡単に説明するか。

「MSってのは、地球上や宇宙空間で主に活動することのできる機体で、敵対勢力との戦闘を目的として造られた機体でもある。それと俺が乗っているダブルオーガンダムは、GNDライブ、通称「太陽炉」と呼ばれる半永久機関を搭載しているが、太陽炉は起動開始から常に「GN粒子」と呼ばれる特殊粒子を生成し、機体の稼働エネルギーのほかに、高濃度圧縮した粒子による強力なビーム兵器、飛行用の推進剤（GNバーニア）など様々な用途に利用されている。そのため時間単位で生成できる粒子量には限度があり、これを上回るペースで粒子を消費していけば、新たに粒子が生成されるまで一時的にエネルギー切れになる。まあ、無理しなければ大丈夫なんだけどな。説明はこんなもんかな。」

「……驚きすぎて言葉が出ないわね。」

「まあ、この世界にはない機体だからな、しょうがないだろ。」

「!?!?いまあなた、この世界にはない機体っていったかしら。」

ソファアから身を乗り出す勢いで香月は聞いてきた。

「ああ、言ったな。ついでにいうと、俺もこの世界の住人ではない。いわゆる、異世界人だ。」

「!?!?」

「そういうことから、俺はこの国にも部隊にも所属していないということだ。」

俺がそういうと香月はソファアに座り何かを考えるようなポーズをした。

「・・・あなたが私に嘘を「こんな嘘についてなんのメリットがあるっていうんだ?」・・・。」

「まあ、いきなりそんなこと言われても信じられないだろうな。俺だったら、そんなこと言う奴が出てきたら、追い出すね。だから模擬戦をしないか?」

「模擬戦?」

「ああ。この基地にある戦術機と俺の機体で模擬戦をして、圧倒的な差で勝利すればあんたも納得するだろ?」

「・・・そうね。それなら私も納得して・・・いいえ、するしかないでしょうね。」

「決まりだな。それで予定は何日に？」

「今からよ。」

マジですかあゝ。今日はこれで帰ろうかと思ったんだが、本人がいないと言っているのならしょうがないか。

「わかった。そんじゃ、準備ができたら呼んでくれ。俺は格納庫の方にいるから。」

そう言って俺はソファから立ちあがる。そしてそのまま部屋の外に出ようと歩き出す。

「おっとその前に見ておきたいものがあつたんだった。」

俺は再び香月に振り返る。

「なにかしら？」

「鑑　純夏を見せてもらってもいいか？」

「「！？」」

ん？なんか二人が滅茶苦茶俺を警戒してるんだが、なんか変なことを言ったか？

「どうしたんだ？いきなり警戒心なんか出して。」

「・・・あんたそんなことまで知ってるの？」

そんなこと？・・・あゝ、なるほど。そういえば極秘だったな。コレ。

「まあな。この世界に今から何が起ころうとも知ってると言ってもいいな。」

まあ、俺の記憶どうりに行くかどうか知らんけどな。

「なんですって!？」

「そういえば、第四計画があまり進んでないんだっ たな。」

俺は少し意地悪く言う。

「ぐっ！」

「だが安心しろ、第四計画は成功する。」

「？」

[illegible]

これが、魔女と俺との最初の・・・話し合い？（追いかけて）であつた。ちよつ、眼が怖つ！

第七話（後書き）

相変わらず短くて済みません。どうにか頑張っているのですが、これくらいが俺の文章力の限界なようです。それでも読んでくれる人のために、これからもがんばって書いていこうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3195o/>

最強が行く世界その名は、マブラヴ！？

2011年6月2日05時02分発行